

# 右京三条一坊八坪の調査

—第448次

## 1 はじめに

本調査地は、(株)積水化学奈良工場内に付設されているグラウンド内にあたり、当該地に平城京遷都1300年祭にともなう平城京歴史館が建設されることになったため、その事前調査としておこなわれたものである。調査面積は1100m<sup>2</sup>で、調査期間は2009年1月6日から3月23日である。

## 2 調査成果

**基本層序** グラウンドの盛土の下には、近代の整地土や耕作土(後述のSX2943など)が幾層にも重なっていた。

それらを除去すると、調査区中央に廃材や瓦礫などを含む粘質土層が検出され、巨大な池の埋土に相当することが判明した。したがって、奈良時代の遺構面は調査区東側と北側にわずかに残されているのみであった。

### 奈良時代以前の遺構

**SD2933** 後述のSG2935の底で確認された旧流路である。幅は6mで、北西から南東に向かって流れているようである。埋土からは弥生時代の土器が出土している。

**SD2934・2936** SG2935およびSG2940の底で確認された旧流路である。SD2933同様、北東から南西に向けて流れているが、幅は20~30cm程度と極めて狭い。

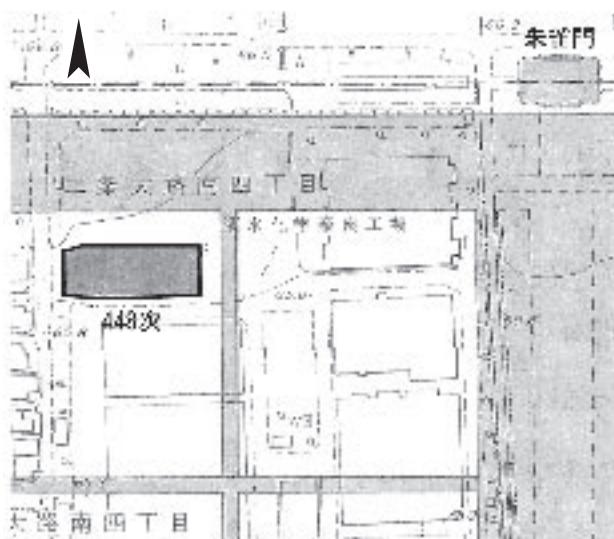


図229 第448次調査区位置図 1:3000

### 奈良時代の遺構

**SD2925・SX2926** 調査区東側で検出したL字状の溝と、その内側の整地土層である。SD2925は南北15m以上、東西5m以上にわたる溝で、深さは15cm前後、溝底は極めて凹凸が激しい。検出当初は、L字状に広がる瓦溜として認識され、ある程度瓦溜を除去すると、溝の掘方が明瞭となった。したがって、瓦を含む埋土が溝の外側にあふれるようにして広がっていたものといえる。

SD2925の内外では整地土層が大きく異なり、内側には瓦を含む赤褐色の整地土が確認された。この整地土面においては柱穴などの遺構は検出されていない。

遺構の解釈としては、整地土(SX2926)が建物基壇の積土に相当し、SD2925がその外周施設の痕跡を示すものと考えられる。雨落溝である可能性も想定できるが、溝の形状自体が比較的不整形で、底の形状も凹凸が激しいことから、基壇外装などの抜取痕に相当すると推定される。整地土面で遺構が検出されていないのは、基壇が大きく削平され、柱穴などの痕跡も消滅してしまったためであろう。なお、掘込地業などは確認できず、地山上に直接基壇が築かれたものと考えられる。



図230 SD2925とその上層(北から)

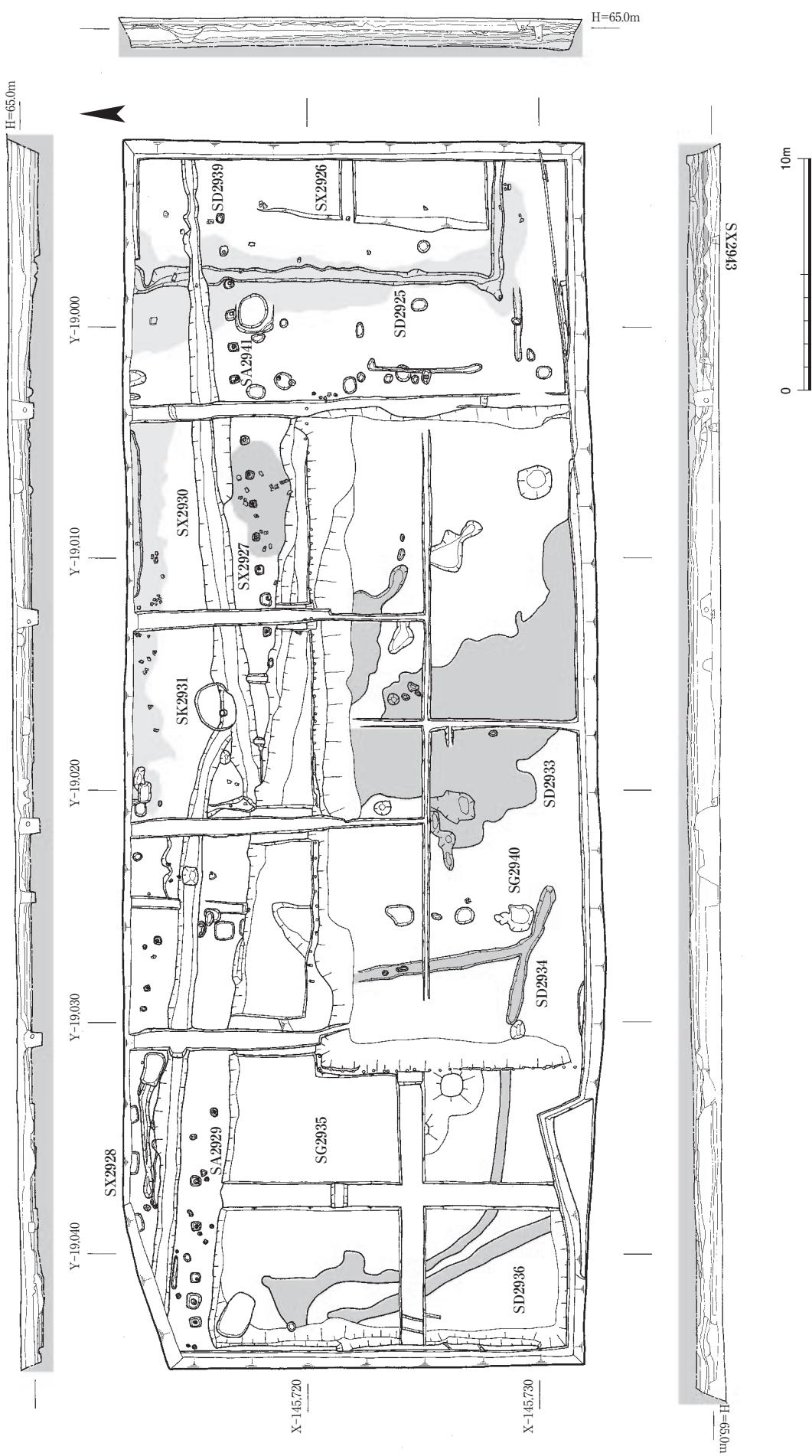


図231 第448次調査遺構平面図・断面図 1:250

**SX2930** 調査区北側で確認された、東西20m以上におよぶ瓦溜である。調査区東側のSD2925上層の瓦溜に比べると土器の出土量が多く、両者に差異が認められる。瓦溜の下層から遺構は検出されなかったが、瓦溜の範囲から想定すると、調査区北側に何らかの建物の存在が想定される。

**SX2927** SG2940の北岸で確認された焼土面である。範囲は東西3.2m、南北1.6mにおよぶ。赤化した焼土だけでなく、炭化物も多量に確認されている。中には瓦片も多数含んでいるが、それらに二次焼成が認められないため、瓦は焼土面が形成されてすぐに投棄されたものと考えられる。調査区内で焼土面が確認されたのはこの箇所だけなので、性格自体は不明である。

**SK2931** 調査区中央で確認された土坑である。形状はほぼ円形で、直径は1.3m。南半部は近代の溝SD2939によって破壊されている。埋土からは完形を含む土器が3点出土しており、底部は長胴甕1点が完形の状態で出土した。これは、人為的に据え付けられた可能性が高い。

この土坑については、関連する遺構が他に確認されていないため、その性格は不明である。

**SX2928** 調査区北東で確認された3基からなる柱穴群

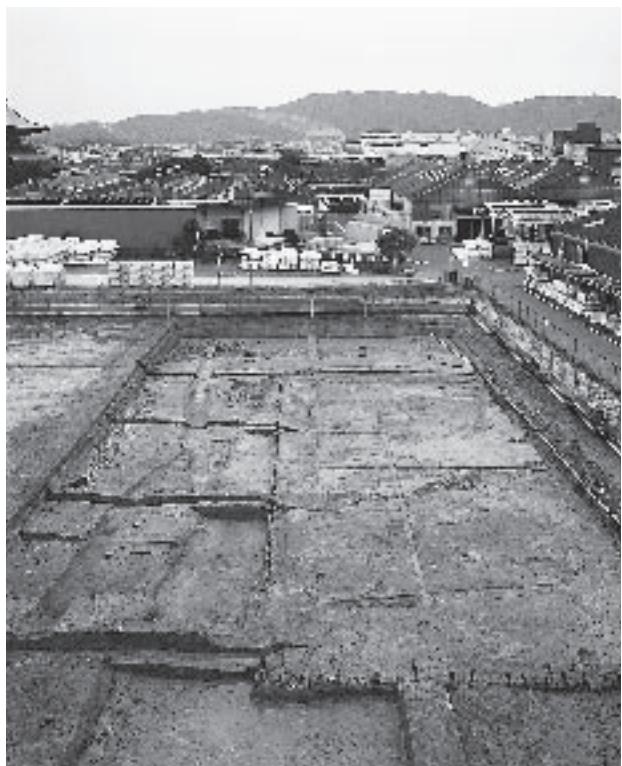


図232 SG2935とSG2940（西から）

である。建物跡の可能性もあるが、柱間が一定しないことと、確認できた範囲が極めて限定されているため、今回はその判断を保留しておく。

**SA2929** SX2928の南で東西に並ぶ柱穴列である。柱間がほぼ一定であることから、柵列の一部と考えられる。西側は調査区外へと続いている。

#### 近代の遺構

**SG2935** 調査区西側に広がる池である。東側はSG2940によって破壊されているため、北岸と西岸とおぼしき立ち上がりを確認したのみで、全形はあきらかではない。ただし、池底の標高がSG2940とほぼ同一であることから、SG2940のかなりの部分までSG2935が広がっていた可能性がある。池底は、一部に島状の高まりも確認できるが、基本的には平坦である。この池はSG2940を造る際に埋め立てられているが、埋土の中から昭和期の生活用具が出土することから、SG2935の成立時期もその頃に認められよう。

**SD2939** 調査区北側を東西に流れる溝である。検出した長さは約18m、幅1m前後、深さは約10～25cmである。その標高から西から東へと流れているようであり、その西端がSG2935につながることから、SG2935から排水していたようにみえるが、後述のSA2941がSG2935によって掘り込まれていることから、SD2939はSG2935以前に機能していた溝と考える方が妥当であろう。

**SA2941** SD2939の南側に沿うかたちで、東西に並ぶ一連の柵列である。柱穴のいくつかには柱根が残存していた。西端の柱穴がSG2935によって掘り込まれている状況を示すことから、SD2939同様、SG2935より古い時期の遺構である可能性がある。

**SG2940** 調査区の中央部を占める池である。東西18m、南北7.5mの方形の池で、現状での深さは約25cmである。

この池はSG2935を埋め立てて造られているが、池底の標高がSG2935とほぼ同一であることから、SG2935の一部を利用しながら、方形に拡張した状況が想定される。周囲には護岸杭列を設けており、杭の間を細い針金で結んでいる。東岸の護岸杭列は検出されず、上層のグラウンドにともなう暗渠によって破壊されたものと考えられる。南岸は調査区外に位置するが、調査区南側でおこなった立会調査で確認されており、そこでは他の岸と同様、護岸杭列が確認されている。

池の埋土は木材やレンガ、スレート瓦などの建築廃材や、陶磁器やガラス瓶などの生活用具を多数含んでいた。特筆すべき点として、英字看板や葉巻などの米軍に関連した遺物が出土している。

SX2943 グラウンドの盛土の下層に位置していた畠の畠の痕跡である。南壁断面で確認した。

この畠の畠に関しては、昭和19年（1944）12月26日付の奈良新聞において、「横領町の約400坪の競馬場跡地で野菜等をつくる」という戦時中の風景を紹介した記事が掲載されているが、住所と層序から判断すると、この時の畠の畠に相当すると考えられる。

### 3 出土遺物

瓦磚類 第448次調査において出土した瓦磚類を表16にあげた。このうち、軒瓦に関して特徴的なのは、奈良時代後半の瓦が大半を占めることである。特に主体をなすのは、6316B・S・6710A・6711Aのセットである（図233）。これらは平城宮でも一部出土するが、むしろ平城京からの出土が顕著である。また、6316S型式は奈良山丘陵の瀬後谷瓦窯からの出土が認められるが、京内からのまとまった出土例としては今回がはじめてである。

次に問題となるのが、これらのセットの時期である。『平城報告XIII』では6316BをIV-1期に、6710A・6711AをIII-2期に比定し、両者にセット関係が認められる

表16 第448次調査 出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦			
型式	種	点数	型式	種	点数
6127	A	1	6643	E	1
	B	1	6646	?	1
6133	?	1	6685	E	3
6302	A	1		?	1
6316	B	28	6710	A	20
	S	15		?	2
	?	6	6711	Aa	1
型式不明		19		Ab	2
				A	2
					15
軒丸瓦計		72	軒平瓦計		48
<u>道具瓦</u>					
隅切瓦	4		面戸瓦		2
軒棧瓦	2		用途不明		3
熨斗瓦	3				
道具瓦計					14
<u>丸瓦</u>		平瓦	磚・凝灰岩		
重量	350.372kg	1451.5kg	1.359kg		
点数	4746	30388	3		

場合があることから、6710AがIV期においても使用されていたとする。しかし、III-2期たる6710Aは宮・京内において基本的に6316Bとしかセットにならない。またIV期に比定される6316Bは直立縁をもつものの、中房が高くななく、蓮子が1+8と6316型式の中では古い要素をもつ。したがって、6316B-6710AのセットはIII-2期において差し支えないと考える。逆に6711Aは、6316型式の中でもIV期に属するものとセットになることが基本であることから、IV-1期に比定したい。すなわち、本調査ではIII-2期に6316B-6710A、IV-1期に6316S-6711Aのセットが用いられていたと考える。

なお、瀬後谷瓦窯において6316Sは粘土紐作りの平瓦とともに同一の灰原から出土しているようであるが、本調査出土の平瓦の多くは一枚作りであり、縄叩きの上から指頭圧痕を施す特徴をもつ。このことから、瀬後谷瓦窯とは異なる瓦窯において、6316Sが製作されていた可能性も考慮しておくべきであろう。（林 正憲／文化庁）

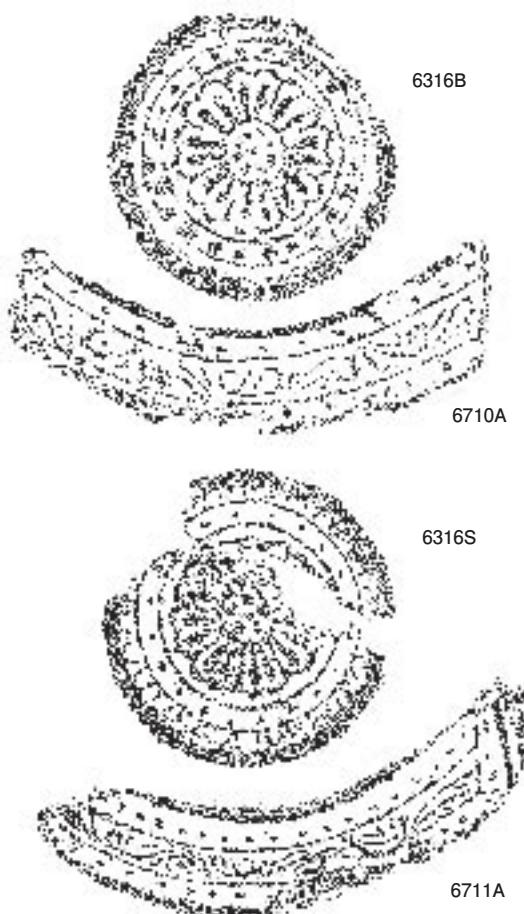


図233 第448次調査出土軒瓦（一部） 1:4

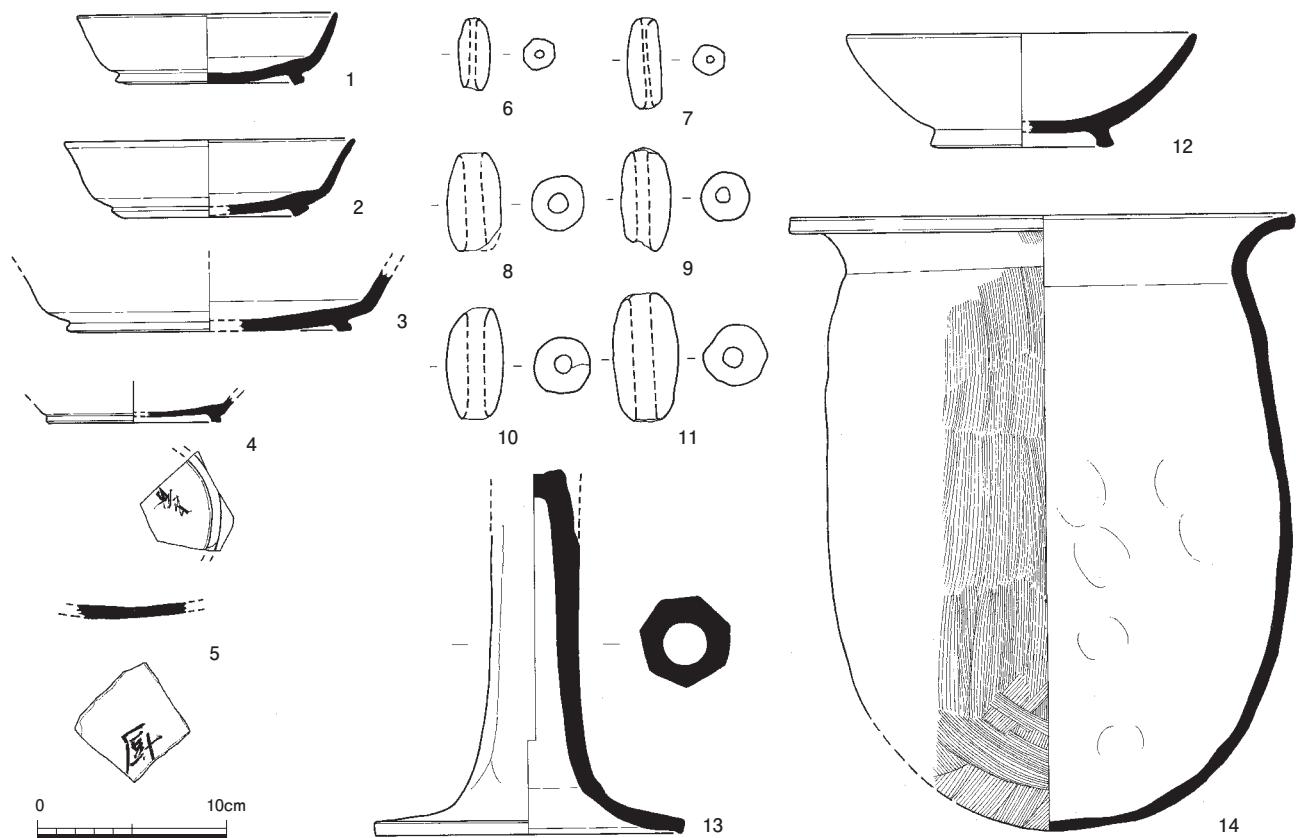


図234 第448次調査出土土器・土製品 1:4

**土器・土製品** 第448次調査では、SD2925・SX2930を中心として、整理箱24箱分の土器・土製品が出土した。遺構にともなう一括資料は存在しないが、比較的残りの良い特徴的な遺物の概要を示す。

1～3は、SK2931から出土した須恵器の杯B。1は、高台を底部外縁より少し内側に貼り付ける。ほぼ完形で奈良時代でもやや古い様相を示す。2は、高台を底部外縁よりやや内側に傾いて貼り付ける。若干内湾した後に外反して細く立ち上がる口縁部など、器形的には、長岡～平安初期の灰釉陶器に似ている。3は、高台が残る破片。底部内面が摩耗し、墨の痕跡が見られるように硯に転用されていた。

4・5は墨書のある須恵器。いずれも杯の底部外面に墨書し、4は「上家」、5は「厨」とある。

6～11は紡錘形の管状土錐（関雅之「古代細型管状土錐考」『北陸考古学』第3号1990）。本調査では、SD2925・SX2930の2カ所に分かれて41個体がまとまって出土した。これらは胎土・色調などが均質で、セットをなす漁具と思われる。両遺構の埋め立て時期が近いことが推察

されよう。土錐はいずれも直径0.8～1.2cmの芯棒に粘土を巻き付けて成形したもので、胎土は黄白色～白色を呈し、径の大きい砂粒を比較的多く含む。

完存する33個体の法量をみると、長さ・直径・重さで4分類できる。A類は長さ3.8～4.6cm、直径1.6～1.7cm、重さ11～14gで2個体出土した（6・7）。B類は長さ5.0～5.3cm、直径2.6～2.9cm、重さ33～39gで2個体出土した（8・9）。C類は若干幅があるものの長さ5.3～6.0cm、直径3.0～3.4cm、重さ49～69gで27個体出土した（10）。D類は長さ6.3～7.8cm、直径3.3～3.5cm、重さ75～85gで2個体出土した（11）。

12は緑釉陶器の椀。部分的に濃緑色・黒色に変色し釉が剥落するが、本来は全体に薄緑色の緑釉が施されていたものと思われる。器形は長岡京期といわれる興福寺一乘院の宸殿下層出土緑釉椀と酷似する（『年報1964』）。

13・14は土師器。13は高杯脚部である。脚部を粗く面取りし、器高が高い点など平城宮土器VI～VIIの年代が考えられる。14はSK2931出土の長胴甕で、外面全面に煤が付着する。

（城倉正祥）

## 4 まとめ

奈良時代の状況 本調査区において、奈良時代の遺構面はわずかな範囲でしか確認されなかった。しかし、その狭小な範囲内において基壇建物である可能性が高い遺構の痕跡を検出できたことは、重要な成果といえよう。

出土遺物などの時期から、SD2925やSX2930は平城京廃絶時に形成された遺構であるが、含まれている瓦は奈良時代後半のものであることから、基壇建物の整地土たるSX2926や、SX2930の北方に想定される建物など、奈良時代後半にいくつかの建物が建造されていたことがわかる。またSD2925が南北から東西に屈曲する点や、SX2930も東西に規則正しく延びる点などを考慮に入れると、きわめて整然とした建物配置がとられていた可能性が高い。

右京三条一坊は朱雀門の南西に面した一等地であり、かつ若犬養門周辺の調査において大学寮に関連した木簡も出土していることから、この地に大学寮などの重要な役所が置かれていた可能性も指摘されている。今回の調査では大学寮に関連する遺物等は出土していないが、SX2926にみられるような基壇建物の検出例は、平城京内においてもきわめて少ない。この事実こそが、当該地の重要性を物語るものであろう。

ただし、今回の調査では、奈良時代前半の状況をあきらかにすることはできなかった。今後の課題といえよう。

近代の状況 今回の調査では当該地における近代の土地利用の変遷状況をあきらかにすることことができた。以下では検出遺構と関連づけながら、この地に展開された近代史を整理してみたい。

当該地の最大の特徴は2時期の池が存在していることである。まず、古相にあたるSG2935であるが、明治41年（1908）に測量された地籍図には当該地に池が認められないことから、それ以降に掘削された溜池であったことがわかる。次に、SG2935が埋め立てられた後に土管による給水施設（SX2942）や護岸杭列をもったSG2940が造られるが、これは1929年に当該地に設けられた奈良地方競馬場に関連する施設である可能性が高い。おそらくは競走馬の飼育や管理に使用するための貯水施設と考えられる。

この奈良地方競馬場は1940年に秋篠町（現在の奈良競輪

場）に移設され、その後、この地には太平洋戦争中に興亜機械工業なる軍需工場が建設される。しかし、この軍需工場は旧競馬場敷地の全面を使用していたわけではなく、約400坪の空閑地が残されていたようである。そこに、戦時中の食糧難に対応すべく、畠が設けられていたのであろう（SX2943）。これらの畠がSG2940のすぐ側に営まれていた点は興味深い。

そして終戦後、軍需工場を米軍が接収し、当該地にグラウンドを敷設する。この敷設は戦後きわめて迅速におこなわれたようで、1946年10月2日に米軍によって撮影された航空写真を見ると、既に野球用のグラウンドが設けられていることがわかる（図235）。すなわち、この段階ではSG2940が埋め立てられてしまっているのである。このことから、SG2940から出土した廃材は興亜機械工業の建築廃材と考えられ、基地施設を造営した米軍によって投棄されたのであろう。米軍関係の生活用品や薬莢が出土していることもその傍証といえよう。

その後、1952年5月には朝鮮戦争から帰還した米軍を慰安するためのR Rセンター（Rest and Recuperation center）が設けられるが、治安の悪化などを招いて地元の反発にあい、1953年8月に神戸に移転する。その後、1956年9月まで米軍の接収地であったが、接収解除後、1957年に積水化学工業によって新奈良工場が設立、現在に至るわけである。

このように、今回の発掘調査の成果は奈良時代の歴史だけではなく、奈良市の近代史の一面を鮮やかに浮かび上がらせたといえよう。 （林）



図235 米軍撮影の空中写真（1946年撮影、国土地理院より）